国　語　科　学　習　指　導　案　（６年１組）

令和３年１１月１６日(火)　第５校時　（教室）　指導者

授業改善の視点

なぜ題名が「やまなし」なのかを考える場面において、自力解決の手がかりとなる観点をもとに考えさせることにより、児童は、作者の思いについて自分の考えをもつことができるであろう。

１　単元名　作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう
　教材名　「やまなし」　資料「イーハトーヴの夢」（光村図書６年）

２　目標　　「やまなし」に描かれた世界について、資料「イーハトーヴの夢」を参照しながら、表現や構成、作者の思いなどの面からとらえ、自分の考えをまとめることができる。

３　学びのつながり
・東連携型小中一貫校の指導の重点〈国語〉
　〇語彙力を高める。（豊かな語彙を漢字も交えて文章の中で使える）
　〇読解力を高める。（主語と述語を見分けられる）
　〇情報処理力（収集、選択、判断）を高める。
【これまでの学び】

【ここでの学び】
　本単元は、宮沢賢治の作品「やまなし」と賢治の生涯について書かれた資料「イーハトーヴの夢」から構成されている。「やまなし」を一読した後の疑問や難しいと感じるのはなぜかということを大切に扱い、特徴ある表現に着目して読み進めようという意欲を喚起していく。資料「イーハトーヴの夢」を読み、作者の生き方や考え方を知ったうえで、再度「やまなし」の表現に着目させることにより、作者の生き方や考え方と重ね合わせて作品の世界を捉えるという学習に取り組む。また、二つの場面を対比させ、「十二月」だけに出てくる「やまなし」を題名にしたのはなぜかを考えさせることにより、題名に込められた作者の思いに迫れるようにする。
【このあとの学び】
　これまでの学びや本単元での学習をもとに、６年３学期の物語文「海の命」では、人物同士の関わりや人物の生き方が書かれている表現に着目して読み、人物の生き方について自分の考えをまとめ、話し合う学習をする。

４　評価規準
【知識・技能】
　比喩や反復などの表現の工夫に気付いている。　（１）ク
【思考・判断・表現】（C 読むこと）
　①「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。　C（１）エ
　②「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。　C（１）オ
【主体的に学習に取り組む態度】
　表現や構成等に着目して作品世界を捉えることに粘り強く取り組み、学習の見通しをもって自分の考えを書こうとしている。

５　人権教育との関わり
　意見交流を通して学習課題を解決する場を設定し、互いの考えを受け入れながら自分の考えをさらに深めていく活動を積み重ねていく。本単元では、作者の人物像や表現の工夫、作品に込めた思いなどの課題に対する考えをもたせる際に、自力解決の手立てを工夫し、各自が根拠をもって考えを表現できるようにする（自己決定）。話合いの場では、児童が相互指名で意見をつないでいく中で、共通点や相違点に着目させる。自分とは違う考えについて、なぜそのように考えたのかを予想させたり、

同じ立場の考えでも根拠が違う場合があることに気付かせたりすることで、多様な考え方を認め合えるようにする。さらに、自分では思いつかなかった他者の考えに納得して自分の考えが深まったり、自分の考えを受け入れてもらったりする経験を重ねることにより、集団での学びの楽しさを実感できるようにする（自己存在感・共感的人間関係）。

このような学習活動を通して、中学校区「人権教育で育てたい能力・態度の観点」における「互いのよさや違いを認め、多様な価値観を理解する。（知性）」「集団の規律を学び、望ましい人間関係づくりの基礎となる伝え合う力を身に付ける。（技能）」「他者の意見や情報を踏まえ、自分の持っている知識や経験を振り返り、公正・公平に判断する。（判断力）」を育てていきたいと考える。

6　単元計画および指導方針　（評定に用いる評価は囲い文字）

時	過程	学習活動	評価	指導方針
1・2	ふれる	・「やまなし」の範読を聞き、物語の設定、初発の感想、疑問、一文（物語を一文で表す）を書く。 ・出された疑問について交流した内容をもとに、学習計画を立てる。 作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう。	主	・単元を通して並行読書ができるように、宮沢賢治の作品のコーナーを設置し、関連図書にふれる環境を整えておく。読んだ作品について、内容や感想を読書カードに記入させる。 ・「やまなし」の疑問（みんなで話し合いたいこと）や既習の物語文の学習をもとに学習計画を立て、主体的に学習に取り組めるようにする。
3	追究する	・「五月」と「十二月」に描かれている様子を簡単な絵や図で表す。	知思①	・最初と最後の文をノートの左右に、その間に各場面の様子を簡単な絵や図、言葉で表現させることにより、作品が額縁構造であることをとらえさせる。 ・まだ分からない部分があることに気付かせ、作者の生き方や考え方に関する資料を読む学習へとつなげていく。
4・5		・資料「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治の生き方や考え方をとらえる。	思②主	・資料「イーハトーヴの夢」をもとに、賢治の生い立ちや作品などについてまとめさせ、生き方や考え方をとらえられるようにする。「永訣の朝」「雨ニモマケズ」なども紹介する。 ・根拠となる叙述をもとに「宮沢賢治さんは～な人」と人物像を表現させる。
6		・「やまなし」の心を引かれる言葉や表現を見つけ、情景を想像する。	知 思①	・比喩、擬声語、擬態語、色などに着目させ、その表現効果に気付かせる。 ・心に響くお気に入りの表現を見つけさせ、そこから感じ取った思いをまとめさせる。
7・8		・「五月」と「十二月」の場面を対比する。	思②	・対比しやすいように、「かにの会話や様子」「水や光の様子」「色」「上から来たもの」の観点ごとに、二つの場面を上下に分けた表にまとめさせる。 ・対比したことをもとに、「五月」と「十二月」の各場面を「～世界」と表現させる。
9本時		・題名に込められた作者の思いを考える。	思②	・「やまなし」という題名の意図に着目させることにより、作者が伝えたい思いについて考えさせる。 ・課題解決の際に複数の観点を示すことにより、自分の考えをもつ手がかりとしたり、話合いで考えを深めたりすることができるようにする。

10	まとめる	・宮沢賢治の作品について、感想を交流する。 ・単元全体を振り返り、身に付けた力や今後の生かし方をまとめる。	主	・前時の「やまなし」の学習を振り返らせるとともに、並行読書で読んだ作品の内容や感想を記入してきた読書カードをもとに、宮沢賢治の作品世界について意見交流をさせる。 ・「つながりブック」を用いて、振り返りをさせることにより、学習を通して付けた力を確認したり今後の学習への生かし方を考えたりできるようにする。

7　本時の学習

(1)ねらい　　作者が「やまなし」に込めた思いについて、自分の考えをまとめることができる。

(2)つなぎ教材

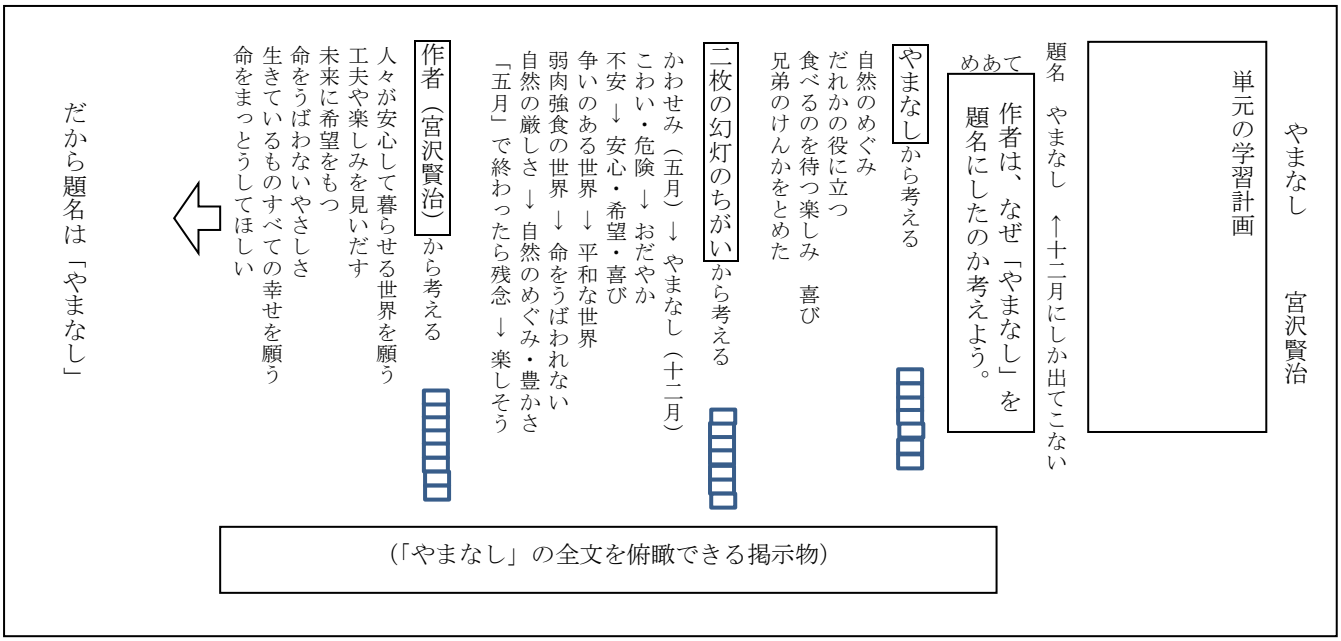
①教材名　前時までのノート（五月と十二月の対比、作者の生涯や人物像など）

②目的　課題解決の手がかりを見つけ、既習内容をもとに自分の考えを形成させるため。

③つなぎ方　課題を解決する際の手がかりとなりそうな部分をノートから探させたり（つなぎ方１）、課題解決の場面で自分の考えをもつときの根拠としたりする（つなぎ方２）。

(3)展開

主な学習活動	時間	指導上の留意点 （◎学びのつながり　※生徒指導の３機能）
1　前時までの学習を振り返り、本時のめあてをつかむ。 〈めあて〉作者は、なぜ「やまなし」を題名にしたのか考えよう。 	7	◎課題解決の必要性を感じられるように、児童の初発の感想の中から、題名や作者の伝えたいことに関する疑問を紹介し、学習計画を立てた際の学習を想起させる。 ◎「つながりブック」を用いて、４年「一つの花」の題名の学習を想起させ、「やまなし」も題名が作品の主題に関わっていることに気付かせる。 これまで ・２枚の幻灯があるのに、「十二月」にだけ登場する「やまなし」が題名になっていることに気付かせ、作者の意図に目を向けさせるようにする。 ・額縁構造の文章であることや最後の文の「の」に着目させ、幻灯には作者の思いや願いが込められていることを確認する。
2　課題解決の手がかりを見つけ、それをもとにして、題名が「やまなし」である理由を考える。 自己決定	１０	◎既習内容をノートで確認させることにより、課題を解決するために使えそうな観点を挙げさせ、全体で共有する。 つなぎ教材（つなぎ方１） ◎選んだ観点に関する内容をまとめたノートから、課題解決となる根拠を見つけさせ、それをもとに理由を考えさせるようにする。 つなぎ教材（つなぎ方２） ※課題解決の際に、手がかりの中心とする観点（やまなし、二枚の幻灯のちがい、作者）を各自で選ばせ、考えを書けたら板書の各観点にネームプレートを貼らせる。その後、別の観点からも考えさせることにより、学習状況を把握する。
3　題名に込められた作者の思いについて話し合う。	２０	

自己存在感 共感的な人間関係 【思考・判断・表現】〔ワークシート・発言〕 作者が「やまなし」に込めた思いについて、自分の考えを表現している。 例・五月はかわせみが魚を食べる弱肉強食の世界、十二月はやまなしがかにに恵みを与える希望の世界だ。希望をもつことを大切にしたいから、題名を「やまなし」にしたのだと思う。 ・賢治さんは、人々が安心して暮らせる世界を願っている。こわくて厳しい世界ではなく、命をうばわない穏やかな世界を望んでいるから、題名を「やまなし」にしたのだと思う。		※意見交流の中で、自分の考えと似ているところ、自分とは違う考えだが納得したところがあるかに着目させ、互いの考えを認め合えるようにする。 ※児童の相互指名で意見交流をさせる中で、他者の考えを受けて自分の考えを深めた児童を認めたり、必要に応じて話合いの方向修正をしたりすることにより、集団での学び合いができるようにする。 ・「五月は必要か」「十二月の前に五月があるのはなぜか」などの補助発問を、必要に応じて投げかけ、構成の工夫にも目を向けさせる。
4　話し合ったことをもとに、参考となった考えをワークシートに記入する。	5	
5　本時の学習を振り返り、今後の学習への見通しをもつ。	3	・板書のキーワードをもとに、意見交流の中で共感した考えをワークシートに追加記入させ、複数の観点から作者の思いについてまとめさせる。 ・できたこと・分かったこと・気付いたこと、次に生かす振り返りの２観点で、本時の振り返りをさせる。 ◎「つながりブック」を用いて、題名の意図の重要性を確認し、次の物語文「海の命」への学習意欲を高める。　このあと

板書計画